

PTAを語る、 希望を紡ぐ

親、学校、地域共同の力で子どもを育成していく……。このことの意味を否定する人はいないだろう。とくに学校教育においては、子どもの親と日常的な連絡と相談をしながら教育をすすめていくことは、教師にとって不可欠な課題である。だが、これを実践するとなるとなかなか容易ではない。教育の専門家である教師と、わが子の成長発達を担う親が、学校という場でどうつながり、どう支えあって活動していくのかということ、それ自身が公教育にとつての永遠のテーマであるといえる。

「PTA」は、PとTの組織という名前のとおり、教師と親、親と親がつながり、学び成長しあう共同の場として生まれ、育ち、教育の当事者としてのさまざまな役割を果たしてきた。しかし、いま、これまでのそうしたPTAのあり方には新たな課題も生まれてきている。親の働き方の変化にもなつて、家庭のあり方や親の学校参加の仕方も変わってきた。政策的につくられた現在の「学校」の変化は、教師から時間的精神的なゆとりを奪い、親や地域とつながる協同の機会を遠ざけている。すでに、PTA組織のない学校や、親だけで会をつくる学校があらわれるなど、これまでとは違った学校のカタチもつくりだされてきている。

しかし、時代がどう変化しても、1947年に文部省が作成したPTAを奨励する冊子の「父母と先生の会——教育民主化のために」という表題のとおり、教育当事者である親が主体者として学校に参加するこの組織を捨て去っていいのか。その現代的なあり方と意義を再考したい。